

女性のことば

横尾 信男

(平成4年10月1日受理)

Women's Speech

Nobuo YOKOO

(Received October 1, 1992)

1. 世界的な女性解放運動の高まりに伴って、性別によることばの違いについての社会言語学的研究は、1970年代から大きな盛り上りをみせている。そのアプローチには、大別して二つの異なった視点がある。ひとつは、どちらか一方の性にしか使われないような (sex-exclusive)、あるいはどちらか一方の性に好んで使われがちな (sex-preferential) 言語表現に焦点をあてて、男女間の絶対的差異、相対的差異を明らかにしようとするものである⁽¹⁾。他は、社会における女性の役割、女性についての意識が激しく変わりつつある現実に応じ、男女のかかわりにおけることばの社会的機能を究明しようとするものである。この研究領域は女性の地位をさらに向上させようとするフェミニズムの一環を成している。前者の立場では、人類の半数を占める女性を一つの社会的カテゴリーと想定し、地域差、階級差、年齢差などからめて、「女性の使うことば」の音声、文法、語彙、表現などさまざまな側面における言語特徴を記述する。後者の立場からは、上の事実を踏まえながら、「女性についてどのようなことばが使われているか」を分析し、その表現の背後にどのような女性観、人間観、社会観が潜んでいるかを考察する。

この二つのアプローチは、視点こそ違えたがいに排除しあうのではなく、補いあう相関的なものである点に注目したい。言語における性差研究を包括的に押し進めていくためには、女性語の言語的特性だけでなく、社会的連関にも注意を向けていかなければならない。もし言語的不平等が存在するとすれば、それは社会の性役割とも密接に関係しているはずだからである。

当面の課題としては、おおむね前者の視点に立ちながら英語第2研究室

ら、日英語における「女性のことば」(women's speech)について論ずることとしたい。

2. 1 性別によることばの違いは世界の言語に広く分布しているが⁽²⁾、日本語にはいわゆる「女ことば」が存在しており、「男ことば」とのへだたりが非常に大きいと言われている。次の一節に目を向けてみよう⁽³⁾。

() は再び雑誌に視線を落とす。

「それより、何か飲むかい」

「ええ、そうね」

「何を飲む?」

「何でもいいわ」() は投げ槍に言う。

わずか数行の文章でしかないが、日本語を話す人なら誰が読んでもすぐ、これが一組の男女の会話であると分かる。しかも、男女どちらかの字をカッコ内に入れるとして語り手の性を判別することも容易である。言うまでもなく日本語の終助詞には、主として話し手の性による使い分けがある。女性を表わす指標となるのは上の例文中では「わ」「ね」、ほかに、「わね」、「よ」(「わよ」「のよ」)、「の」(「なの」「ですもの」)、「かしら」などがある。一方、男性を表わす終助詞には「な」、「ぞ」、「ぜ」などがある。

次の発話を比べてみよう⁽⁴⁾。

「おれ、腹へったなあ、何かうまいものぐいたいな。」
「あたし、おなかすいちゃった。何かおいしいものたべたいわ。」

「おれーあたし」、「腹ーおなか」、「へるーすく」、「うまいーおいしい」、「くうーたべる」、「なーわ」という、男ことば女ことばの対立が見られる。これほどのはっきりした違いは、他のどの言語にも見当たらない

のではないかとさえ思われる。

2.2 外山滋比古氏は、日本語は仮名に支えられた女性的言語であると言っている。象形文字の漢字は目に訴える、いわば視覚的言語であるのに対し、仮名は耳に訴える聴覚的言語である。日本人の言語行動、とりわけ話し言葉においては、心地よい響きの仮名言葉が大きな比重を占めている。漢字の読み方にしても、音よりは訓の方があっさりした味を好む日本人には向いているのかもしれない。高温多湿の風土からくる日本人の感性や生活感覚が言葉にも影響しないはずはない。そもそも仮名文字は遠く平安時代において女性の手により発達を見たものであった。和歌というような研ぎすまされた短詩型文学を生み出したのも女性であったことを考えれば、外山氏の次のような指摘は味わい深いものと感じとれる⁽⁶⁾。

「これまでの日本女性には聴覚的人間が多い。それは日本語が、男性の言葉と女性の言葉とでかなり大きく違っていることと関係があるかもしれない。……日本語は全体として女性的性格がつよいが、ことに女性の日本語はその特色がいっそう顕著である。文字による認識ではなくて、耳からの言葉による経験によって成長したのが日本女性である。」

女ことばとしての終助詞の多彩さもこのことと無関係ではあるまい。

2.3 丸谷才一氏によれば、かつては「娘ことば」というものがあって、若い娘がどういう口のきき方をするかが作家の芸の見せどころだったらしい⁽⁶⁾。ところが今では、そうではなくなってしまった。それというのも、現代っ子の話し言葉は味もそっけもなく、風情というものが消え失せてしまったからだそうである。たとえば、人との別れ際に昔は「ハイ さようなら」と言ったものだった。それが今では誰も彼も「じゃあね」と言う。「ありがとう」も「どうも」に代替りしてしまった。これでは情感の入るこむ余地はない。外山氏の言うように、耳で聞いてこそ楽しい台詞かもしれないが、活字にしてしまうとなんと趣というものがない。そこで作家は、挨拶は書きこまずに、涙をのんで「二人は駅で別れた」などと愛想のない、洒落っ気もない収め方をしてしまうのだそうである。

2.4 ことばは、社会を写し出す鏡である(Language

mirrors our cultural assumptions)。その時代の動きを敏感に感じとり、伝えてくれるものである。90年代は女性の時代であると言われている。80年代後半から、この時代風潮を予測させるような女性に関する流行語が続々と出現した「オバタリアン」「マドンナ」「セクハラ」等々である。そして「おやじギャル」など、男性のひ弱さとひきかえに女性の強さを揶揄するような言い回しも出まわっている。ひところ、ユニセックスと呼ばれる男女お揃いの服装が若者のファッションとしてもてはやされたことがあったが、言語的空間においても男ことばを女性が使用することにやがては何の抵抗も感じられなくなってしまうのだろうか。「おやじギャル」は中尊寺ゆっこ氏の漫画に登場する女の子のことだそうである。風呂上りにビールをぐいぐいやったり、週末はゴルフを楽しむといった、おちんくさい(ちぢむさい)「おやじ」のもつイメージを、性別、年令ともに対比的な「ギャル」に重ね合わせたところが奇妙な連想を生み出すことになるらしい⁽⁷⁾。

女性語男性語の接近は女子学生の間でも進行している。たとえば、終助詞の乱れは頻繁に観察される。「だよ(だぜ、だろう)」、「しょうよ(しょうぜ)」、「しろよ」、「かなあ」などは男女の別なく使われる傾向にある⁽⁸⁾。

「今晚は飲もうよ」

「変だな。どうしたんだろう」

「あしたは雨かなあ」

この数年来、学生同志のおしゃべりの中でよく耳にするのが「とかって」「とかいって」「とかいっちゃって」である。

「来週の月曜は試験だとかって。あたし、土日バイト入ってんのよとかいって。うん、どうせ、一夜づけだけどー。なんかさ、最悪のケース再試とかいっちゃってさ。」

「一限休講とかって。うそみたい。満員電車でゆられてはるばる来てるってのにさ。あれは許せないとかいって。」

という具合である。はじめは何気なく聞いていたが考えてみると奇妙なことば使いである。こんな文の閉じ方をしなくても十分意味が通じると言っては雑談が成立しなくなってしまうのだろうか。「とかいって」と言ったところでどうするわけでもないのに、などと奇異に感ずるのは私だけであろうか。あらゆる面で男女差がせばまり、ニュートラル化しつつあると言われる今日、若者の

間では女性語が男性化し、男性語が女性化し、これまでの男と女という図式が言語面でも崩れつつあるのかもしれない。

2.5 男女間に明白な用法上の区別があると思われるものに人称代名詞がある⁽⁹⁾。一人称代名詞は主として話し手の性によって異なるタイプである。自分を指すとき、男は「ぼく」「おれ」と言い、女は「あたし」「あたし」と言う。ただし、「わたくし」「わたし」は男女共通に用いられる。二人称代名詞は男女共正式の場ではふつう「あなた」、くだけた場では「きみ」「あんた」「おまえ」を使う（「わし」「おぬし」「きさま」「てまえ」は古い形で、今ではそんざい体）。周知のとうり、主語がなくても意味の通ずる日本語では、一人称代名詞はあまり使われない。二人称代名詞にしても、かなりの目下に向かってならともかく、目上や同輩にはふつう使えない。そのため、鈴木孝夫氏は、話し手が自分を言い表わす言葉をまとめて「自称詞」、話し相手を表わす言葉を「対称詞」と呼んでいる。自称詞には「パパ」のような親族名称や一人称代名詞、対称詞には「お父さん」「お前さん」などの親族呼称、「先生」（自称詞にもなりうる）「駅長さん」などの職業名、「社長」のような役職名、「お客さん」、二人称代名詞などが幅広く含まれる。英語では、原則として話者が自分のことは、男であろうと女であろうと I（場合によっては me）、相手のことは you としか言わない。英語からみると日本語は、実に複雑な体系をしている。

3.1 さて、英語に目を転じてみよう。英語では話し手や聞き手の性を知る手がかりを見い出すことは困難である。P.トラッドギルは“…the differences are generally of the smaller, less obvious and more subconscious type.”（「（性別によることばの）違いは、一般に（アメリカ・インディアン諸語よりも）小さく、はっきりしない、無意識的なタイプのものである」）と言っている⁽¹⁰⁾。彼の研究は、インフォーマントの属する社会階級において、どのような言語変種が男女間に見い出されるかに注目したものであった。彼がノーリッジ地方で行なった調査によると、‘walking’の ing 形の発音に関して、認容発音（received pronunciation）の [ɪŋ] ではなく、非標準形の [ɪn]（walk-in’）の現われる割合は、すべての階級において女性よ

りも男性の方が高かった（表 1）。

この表から、階級が上になればなるほど男女差がいち

表 1 非標準的な-in’形の出現率

	MMC	LMC	UWC	MWC	LWC
Male	4	27	81	91	100
Female	0	3	68	81	97

びるしくなること、男性は標準から逸脱した変種を選び、女性は正しい標準形を選ぶ傾向があることなどが読みとれる。

表 2 は、ing 形の発音に関し、社会階級、性別に新たに発話状況（ことばのスタイル）を加え指数をもって表示したものである。標準形 [ɪŋ] を一貫して発音した場合、指数を 100 と定めてある（表 2）⁽¹¹⁾。

この表から明らかなように、3 個所（LMC-CS、MWC-RPS、UWC-WLS）を除いて、すべての

表 2 ノーリッジにおける変項（ing）—社会階級、性別、文脈的スタイルによる指数得点—

	CS	FS	RPS	WLS
MMC 男性	69	96	100	100
女性	100	100	100	100
LMC 男性	83	73	80	100
女性	33	97	100	100
UWC 男性	5	19	82	100
女性	23	32	87	89
MWC 男性	3	9	57	76
女性	12	19	54	80
LWC 男性	0	0	0	34
女性	0	3	46	83

MMC 中流階級の中 LMC 中流階級の下 UWC 労働者階級の上 MWC 労働者階級の中 LWC 労働者階級の下
CSS くだけたスタイル FS あらたまったスタイル
RPS 朗読スタイル WLS 単語表発音スタイル

項目において女性の指数は男性と同じか、またはそれを上まわっている。また、RPS や WLS、つまり文章なり単語表なりをインフォーマントに与えて読み上げさせる場合よりも、実際の発話、とくにあらたまった発話（FS）において、男女の開きがもっとも大きい。つまり、女性の方が男性よりも規範を重んじ規範に敏感であることをこのデータは示している。

中流の下（LMC）において男女の指数が逆転してい

ることに注目したい。この理由として考えられることは、中流の下に属する女性というのは、中流階級の上と労働者階級のはざまに位置するため微妙な立場にあり、形式ばったスタイル(FS)においては上を見習いつつ、ていねいな言葉使いをするが、その反面、くだけた会話(CS)においてはぞんざいになるきらいがあるということではなかろうか。トラッドギルはこの点を次のように説明している⁽¹²⁾。

“Given that there are linguistic variables which are involved, in a speech community, in covariation with social class (higher-class forms being more statusful or ‘correct’ than lower-class forms), then there are social pressures on speakers to acquire prestige or to appear ‘correct’ by employing the higher-class forms. Other things being equal, however, these pressures will be stronger on women, because of their status-consciousness.”

一方、男性はなぜ規範にとらわれず逸脱した表現を好むのであろうか。それは、そうすることが男らしさ、たくましさを引き立てるといような心理的要因のためなのかもしれない。トラッドギルの同書からの引用を続けよう。

“On the other hand, there will be pressures... to continue using less prestigious non-standard variants as a signal of group solidarity and personal identity. These pressures, however, will be stronger on men than on women, because of concepts of masculinity current in our society. Men’s speech will therefore be less ‘correct’ than that of women.”

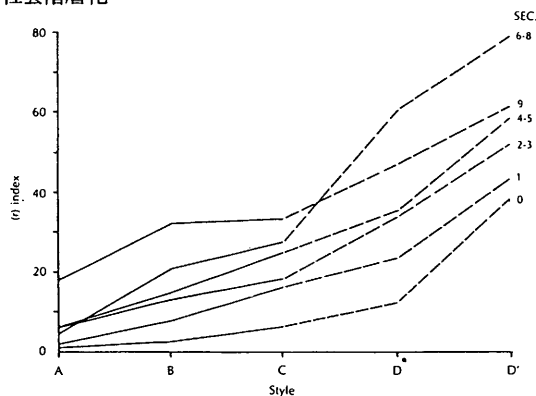
このようなさまざまな圧力をW.ラボフの用語では「潜在的権威」(covert prestige)という。

3.2 自分より上の階級を意識するあまり、ことば使いを正そうとすると、しばしば過剰矯正(hypercorrection)という現象を引き起こす。これは中流の下女性に顕著な現象である。carとかguardなどのような語にみられる、母音の後にくる(post-vocalic)反転音の[r]の発音について、W.ラボフがニューヨークの話者を対象に行なった調査によると、くだけた会話においてはこの[r]は発音されないこともあるという(図

1)⁽¹³⁾。

図 1

ニューヨーク市における変化の経過にある言語変項(guard, car, beard, boardなどにおける)/r/の社会階層化



SEC 社会階級: 0-1 下層階級 2-4 労働者階級
5-6, 7-8 中流階級の下 9 中流階級の上

Style ことばのスタイル: A くだけたスタイル B あらたまったスタイル C 朗読スタイル D 単語表発音スタイル D' 最小対立語発音スタイル r-index r-指数

母音のあとで一貫して[r]を発音した場合を100とし、発音しない場合を0としている。インフォーマントは6グループ、言語スタイルは5種類設定されている。この図でも中流の下は、あらたまった状態の単語表や最小対立語を発音した場合、正確度線が中流の上をとりこし上限にむかって急上昇しているのが見てとれる。これは、正しく発音しようという意識的努力が過度の修正を招いたものと考えられることができる。

デトロイトにおける黒人を対象とした調査でも、この母音に続く[r]の脱落という現象が見られた(表3)⁽¹⁴⁾。

表3は階級別男女別にみた[r]の出現率を表したものである。この表でも明らかに、発音の正確さにおいてあらゆる階級で女子は男子を圧倒している。

表3 デトロイトの黒人のことばにおける、母音の後の/r/出現率

	UMC	LMC	UWC	LWC
Male	66.7	52.5	20.0	25.0
Female	90.0	70.0	44.2	31.7

4.1 文法レベルにおいてもこの男女差は歴然としている。たとえば、非文法的とされるI don't want

none (私は何も欲しくない) のような二重否定の生起する頻度数を男女別階級別に表したのが次の表である(表4)⁽¹⁵⁾。

表4 多重否定使用比率

	UMC	LMC	UWC	LWC
Male	6.3	32.4	40.0	90.1
Female	0.0	1.4	35.6	58.9

二重否定を使用する度合いは、階級が上がれば上がるほど少なく、下がれば下がるほど多いということ、また、いずれの階級においても男子の使用率が女子より高いことなどがこの表からうかがい知ることができる。中流の下で男女の頻度差がいちぢるしくなっているが、これも過剰修正のためと解釈することができるであろう。

4.2 文末表現の中で男女語の相対的差異を表わすものに付加疑問文(tag question)がある。R.レイコフによれば、女性は傾向として次の(b)を含む付加疑問を多く使いたがるという⁽¹⁶⁾。

- (a) The way prices are rising is horrendous.
(b) The way prices are rising is horrendous, isn't it?

(a)は、「物価の上昇がすさまじい」の意で、話し手のまぎれもない断定を表している。(b)は、「物価の上昇がすさまじいですね」の意で、話し手のわずかにためらいがちな判断を表している。したがって、自分の判断に自信のない分だけ、聞き手の同意、確認を求めていることになる。たしかな手ごたえが得られるとは限らないにしても、聞き手の反応に対する話し手のかなりの期待と予測が(b)には感じとれる。聞き手の反応がyes-noどちらに転んでも、話し手は引っ込みがつかない。聞き手としても(a)のように言い切られると押しつけがましく聞こえ、判断の余裕すら与えられないことになる。

付加疑問は口調を和らげ、摩擦をさけるための有効な戦略の一つである。女性の柔軟さ、丁寧さ、思いやりに通じるものがあるかもしれない。

肯定形の付加疑問にはこれと相反する用法がある⁽¹⁷⁾。たとえば、You won't do that again, will you? (もう二度としない、ネ!)には二度としたら承知しないという強圧的な響きがある。日本語の「ね」も尻上りの調子で発音されるとき、同じようなニュアンスをかも

し出す。

4.2 文末に現れる抑揚(イントネーション)にも性差特徴がみられる。R.レイコフによれば、女性に典型的な抑揚パターンは上昇調である。上昇調は、yes-no疑問文やwh疑問文だけでなく、平叙文にも用いられる⁽¹⁸⁾。

(a) When will dinner be ready?

(b) Oh, ...around six o'clock... (ノ)

(a)「夕食はいつ頃ですか」という問に対し、(b)「そうね、6時頃でどうでしょうか」と答えている。(b)には「(もし、あなたがそれでよければ)」の含意がこめられている。文末の省略部分にWill it be all right?と言い足すのと同じことである。一般に、下降調で話した時に男性的に聞こえ、上昇調で話した時に女性的に聞こえると言われる。ピッチが高く、抑揚の幅が広いことが女らしさの属性の一つと考えられているようである。決定的要素であるかどうかは別として、というのは、急上昇して文を完結するイントネーションは話し手の性に関係なく、聞き手に心理的負担を与えまいとする丁寧さ、判断を話し手があからさまに押しつけるのではなく聞き手にゆだねるという意味での戸惑い、感情の起伏の大きさ、社交性を感じさせるという説もある⁽¹⁹⁾。下降調は、男女を問わず、落着き、自信、断定的な感じなどを与える。ピッチの上下の大きな変化、意外性や驚きを示す下降上昇型の抑揚、躍動的な抑揚などは明らかに女性に関連づけられてしかるべきものであろう。

4.3 英語の丁寧表現といえば、人にものを尋ねたり頼んだりするときの決まり文句を真先に思い浮べる人が多いのではないだろうか⁽²⁰⁾。日本語ではさだめし、敬語、謙譲語、美化語(名詞の前に「お」や「ご」をつけた形)といったところであろう。

Would you please...?

I'd really appreciate if...

I'd be very happy if...

I'm awfully sorry to bother you, but could I possibly...?

R.レイコフによれば、こうした依頼の言葉が丁寧になればなるほど男性的な性格が薄れ、女性らしい慎しみ深さと結びつけて考えられることになる。それとは裏腹に説得力に欠けるという批判もある。

丁寧さを表わす表現にはその他に、法助動詞may、

might, couldや副詞perhaps, possibly, maybeなどがある⁽²¹⁾。

We could go around looking for more bottles.
Hey maybe tomorrow we can come up here
and see if they got some more.

また、垣根 (hedge) と呼ばれる語句がある。⁽²²⁾
sort of, kind of (kinda), I guess, you know
(y'know), I wonderなどである。垣根というのは、
文中に適宜さしはさんで、聞き手の注意を促したり、何
らかの反応をひき起こさせたり、場合によっては聞き手
が話を聞いて理解しているかどうかをチェックするとい
うようなさまざまな機能を果たす語句のことである。
It was, you know, really interesting.

話し手と聞き手の間に垣根 (心理的な距離) を設け、
相手の攻撃を防いだり、衝撃を和らげたりすることから
この名がついたものと思う。自己防衛的な意味合いを滞
びることもあり、あまり多く使い過ぎると説得力、迫力
に欠けるきらいがある。

4.4 O. イェスペルセンは女性語について次のような
興味深いコメントを残している⁽²³⁾。"…their instinctive
shrinking from coarse and gross expressions
and their preference for refined and (in certain
spheres) veiled and indirect expressions."

(女性は粗野で俗悪な表現を本能的に避け、上品でしかも
(ある方面においては) ヴェールをかけたような間接
的な表現を好む) 蚊のなくような声の女性が甲高い声で
まくしたてたり、騒ぎだてたりすることは稀であろう。
感情を抑制できずに大音響でわめきちらすのはえてして
男性である。女性は俗語、悪態語、卑猥語、忌み言葉は
あまり口にしないものである。感嘆詞や間接詞の類にも
男女間の区別がある。女性語に分類されるものには、
Oh dear (あれまあ), My goodness (あらあら),
Oh fudge (いやね) などがある。男性語の典型例とさ
れているものには、Shit (くそ), Damn (畜生),
Hell (くたばれ) のほか多数ある⁽²⁴⁾。

Oh dear, you've put the peanut butter in the
refrigerator.

Shit, you've put the peanut butter in the refriger-
erator.

4.5 'empty adjective' も、R. レイコフによれば

性別による使い分けがあるという⁽²⁵⁾。これは一種のほ
め言葉で, adorable, charming, sweet, lovely, di-
vineなどは女性に多く使われる傾向がある。男女両用と
してはgreat, neat, terrificなどがある。文法的にいえ
ば形容詞だが、意味は非常に薄く、ほとんどない
(empty) にも等しい。しかし、人をほめそやして甘い
ムードをかもし出すには欠かせないものようだ。したが
って、相づちを打つにも使いやすい言葉だそうである。
ひところはbeautifulという語が大はやりで、こちらが
何か言ったりすると男女共口をそろえて "Beautiful!"
とうなずいてくれたものであった。

形容詞が出たところで、副詞についても一言ふれてお
きたい。何かをことさらに力をこめて言いたいときに日本
語では入れこみ方に応じて「すごく」「すごーく」とか
「とても」「とっても」と言う。英語でこれに当たるも
のがso, really, awfully, terriblyなど強調の副詞と
いわれるものである。中でもsoに独特のアクセントを
つけて発音するのは女性の習慣である⁽²⁶⁾。

The sunset is so beautiful!

4.6 話をふたたび日本語に戻すことにしよう。寿岳
章子氏は、読者の男女差が使われることばのどのような
差となって現れるかを調査した⁽²⁷⁾。一応女性の読者を
想定して、女性週刊誌のグラビアのことばを取り上げ、
それを一般向けの週刊誌と以下のような項目にわたって
比べてみた。感嘆符のつく文の使用頻度、文中に含ま
れる代名詞と固有名詞の割合、素材の差、文の止めの形な
どである。ここでは最後の項目についてだけ言及するこ
とにしたい。週刊誌のグラビアの文はどのような結び方
をしているだろうか。止めの形には5種類ある。1. 連
用止め「花びらがはらはらと散りかかって…」のように
動詞の連用形で終るもの。2. 連体止め「これはあの人の…」
のように後に体言がくるもの。3. 体言止め「花
は桜木」のように名詞で終るもの。4. その他「あの世
からメッセージを…」のように言いさし型で終るもの。
5. 通常止め 文を完結した形で閉じるもの、である
(表5)。

調査の結果、女性を読み手にしている週刊誌には、通
常止めがきわだって少ないということが判明した。逆に
言うと、たとえば「靴も共のスエードで…」式に思わせ
ぶりの止め方が多すぎることである。女性の読者は、
感情に訴えたりくすぐったりするような書き方さえ

表5 文の止めの出現率(%)

誌 名	通止め	連体止め	体言止め	その他止め	通常止め
週刊新潮	0.0	0.0	21.1	1.0	77.9
サンデー毎日	2.6	0.0	20.1	2.9	74.4
女性自身	7.4	0.0	22.4	18.1	52.1

していればいくらでも読んでくれるという編集者の意図がみえみえである。寿岳氏に言わせれば、「靴も共のステードが似合う」と終りまで言い切るべきであって、そのような文章作りが肝要である。さもないと、女性の読者は編集者の手にままと乗せられ、ため息まじりに読むことになる。

5 以上、「女はどんな話し方をするか」という第一の視点に立ち、日英語の性差表現を探り出してみた。英語には、絶対的差異（一方の性つまり女性によって独占される形）を表わす表現が乏しく、もっぱら相対的差異（女性に好まれる形）を表わすものに限られる。その意味で、英語における性差は、とらえることが難かしく、わずかな形態の特徴をもとに傾向性として指摘しうるにすぎない。それに対して、女性語の宝庫といわれる日本語（十と一の評価を含む）では、話し手が女性であることを示すいくつかの典型例を示すことができた⁽²⁸⁾。

正しさや丁寧さは女性のことばのもつ普遍的な特性と考えられ、男性のことばとの間に有意差が認められる。

これまでの検討の中で挙げられた数々の事実や結論から、どのような洞察が得られるであろうか。これは第二の視点「女性についてどのような話し方がなされているか」と密接にかかわってくる。すなわち、女性に適用されることばの分析と切り離しては考えられない。ことばと性に関するこの研究テーマには「社会を映し出すもの」としてのことばに対する関心以上の意味が含まれている。ことばが男女のかかわりそのものに深い影響を与えるかもしれないし、男びいきの現状に対する変化を促すことも同時に期待できるであろう。最後に、そのような方向にむけての第一歩として問題を提起し、本稿の結びとしたい。

5.1 英語の‘professional’（専門家）という語は、女性に適用される場合と男性に結びつく場合とでは、内包的意味が異なる⁽²⁹⁾。

(a) He's a professional.

(b) She's a professional.

(a)は、医者とか弁護士のような知的職業のイメージを思い起こさせる。(b)はそれとは似てもつかぬいかがわしい職業（娼婦）のイメージを喚起する。このような極端な意味上のズレや意味の墮落といった現象はなぜ起こるのだろうか。

5.2 日本語には、女性に関する表現がふんだんにある。男性のみに使われることばの中にも女性が登場してくるほどである（「女々しい」「女のくさったような」）。その中から例をいくつか取り出してみよう⁽³⁰⁾。

性差別のないもの、あるいは比較的少ないもの
形容詞）やさしい 慎み深い 愛敬がある（女は度胸？）
男勝りの

名詞）紅一点 お嬢（さん）箱入り娘 女子大生 職場の花 ナイスミディ 金さん銀さん（長寿のシンボルの存在）

性差別を含むもの

植物のたとえ）両手に花 壁の花 とうが立つ

食物のたとえ）大根足 クリスマスケーキ 食べごろ

品物のたとえ）売れ残り きずもの かたづく

比喩表現の中には、女性を売り買いの商品といった否定的なイメージでとらえるもの、あるいは性的にいやしめられた連想を伴うものがいやでも目につく。このような食物や品物からの比喩的転用の陰に、女性に対するどのような認知構造が潜んでいるのだろうか。

【引用文献】

- (1) cf., Frank, Francine, and Frank Anshen. 1983. *Language and Sexes*. State University of New York Press. p. 26 参照。
- (2) 一例を挙げると、E. サピアによる北米インディアンのヤナ語の分析によれば、話し手聞き手の性によって（同性同志で話す場合を含め四種類の組み合わせが考えられるが）複雑な形態論的变化を起こすという。cf., Sapir, Edward. “Male and Female Forms of Speech in Yana,” Mandelbaum, D. (ed.) *Selected Writings of Edward Sapir on Language, Culture and Personality*. 1961. University of California Press., pp. 206 ~212.
- (3) 森瑤子「彼と彼女」（昭和62年）角川文庫9頁。

- (4) 寿岳章子「日本語と女」(昭和54年)岩波新書65頁。
- (5) 外山滋比古「日本語の個性」(昭和51年)中公新書134頁。
- (6) 丸谷才一「日本語のために」(昭和49年)新潮社110～118頁。
- (7) 柏木博「おやじギャルの言語空間」『言語』(平成3年1月号)大修館 42～47頁参照。
- (8) 佐久間まゆみ「平成時代の話し言葉」『言語』(平成2年2月号)大修館 62～68頁参照。
- (9) 鈴木孝夫「ことばと文化」(昭和48年)岩波新書,「自称詞と対称詞の比較」『文化と社会』(昭和57年)大修館,17～59頁に基づく。
- (10) Trudgill, Peter. 1974. *Sociolinguistics: An Introduction*. Penguin Books., p. 90.
- (11) Coates, Jeniter. 1986. *Women, Men and Language: A Sociolinguistic Account of Sex Differences in Language*. Longman Group UK Limited.
吉田正治訳「女と男とことば—女性語の社会言語学的研究法」(平成2年)研究社,74頁。
- (12) Trudgill, Peter. *op. cit.*, p. 94.
- (13) Labov, W. 1972. *Sociolinguistic Patterns*. University of Pennsylvania Press. p. 114.
- (14) Trudgill, Peter. *op. cit.*, p. 92.
- (15) Trudgill, Peter. *idid.*, p. 91.
- (16) cf., Lakoff, Robin. 1975. *Language and Woman's Place*. Harper & Row., p. 16.
- (17) cf., Spender, Dale. 1980. *Man Made Language*. Routledge & Kegan Paul.
れいのるず・秋葉かつえ訳「ことばは男が支配する—言語と性差」(昭和62年)勁草書房,15頁。
- (18) cf., Lakoff, Robin, *op. cit.*, p. 17.
- (19) 井出祥子「男／女性語の比較」『文化と社会』(昭和57年)大修館,151～169頁参照。
- (20) cf. Coates, Jeniter (吉田正治訳)「前掲書」125頁参照。cf. Lakoff, R. *op. cit.*, pp. 17～19.
- (21) cf. Coaters, J. (吉田正治訳)「前掲書」126頁参照。
- (22) cf. Lakoff, R. *op. cit.*, p. 54.
- (23) Jespersen, Otto. 1922. *Language, Its Nature, Development and Origin*. George Allen & Unwin., p. 246.
- (24) cf. Lakoff, R. *op. cit.*, pp. 9～11.
- (25) cf. Lakoff, R. *ibid.*, pp. 11～12.
- (26) cf. Lakoff, R. *ibid.*, pp. 14～15; pp. 54～55.
- (27) 寿岳章子「日本語と女」(昭和54年)岩波新書 25～33頁参照。
- (28) なお, 次のような, 現代の若者が聞いたなら何語かと疑いたくなるような敬語表現(謙譲語, 美化語を含む)については本稿では扱わなかった。機会をあらためて論ずるつもりである。
A「まあ, ご立派なお庭でございますわねえ。芝生がひろびろとしていて, 結好でございますこと。」
B「いいえ, なんです, ちっとも手入れが行き届きませんものでございますから, もう, なかなかいつもきれいにしておくわけにはまいりませんのでございますよ。」
A「ああ, さいでございましょうねえ。これだけお広いんでございますから, ひととお手入れあそばすのにだって大変でございましょうねえ…」(Miller, R. A. 1967. *The Japanese Language*. University of Chicago Press., pp. 289～290. ローマ字で書かれた文を漢字と平仮名にあらめてある)。
- (29) Lakoff, R. *op. cit.*, pp. 30.
- (30) cf. Cherry, Kittredge. 1987. *Womansword: What Japanese Words Say About Women*. Kodansha International.

〔その他の参考文献〕

- (1) Cameron, Deborah. 1985. *Feminism and Linguistic Theory*. Macmillan.
中村桃子訳「フェミニズムと言語理論」(平成2年)勁草書房。
- (2) 井出祥子「女のことば男のことば」(昭和54年)日経通信社。
- (3) Ide, Sachiko and McGloin, Naomi Hanaoka (eds.), 1990. *Aspects of Japanese Women's Language*. Kuroshio Publishers.
- (4) MaConnell-Ginet, Sally, Borker, Ruth and Furman, Nelly (eds.), 1980. *Women and Language in Literature and Society*. Praeger Publishers.
別府恵子編訳「文学と社会における女性と言語」—

言語表現と性差別—(平成元年)弓書房.

- (5) Smith, Philip M. 1985 *Language, the Sexes and Society*. Basil Blackwell Publisher.

井上和子, 河野武, 正宗美根子共訳「言語・性・社会」(昭和62年)大修館.

〔概 要〕

How and why does women's speech differ from men's? Women's speech is one of the contemporary issues which has attracted over the last two decades those concerned with sex differentiation in language use. It can be approached from two different, but closely interrelated perspectives: descriptive and feministic. Most works nowadays take a feminist standpoint, but the focal point of the present paper is to illustrate multiple examples of women's speech in Japanese and in English, and give a general sense of what it is *to speak like* a woman.

How do women talk? Japanese is a rich source for research on sex distinctions. It contains such sex-exclusive features as sentence final particles and person referents. Sentence final particles 'no' and 'wa' are exclusively for women, while 'da', 'na' and 'ze' are more for men. The first person pronoun 'watakushi' is for both sexes. 'Boku' and 'ore' are masculine, while 'atakushi' and 'atashi' are feminine. The second person pronouns 'anata' and 'kimi' are partly sex dependent. Terms used to refer to the addressee differ greatly depending on the speaker/hearer's status and gender differences.

English is abundant in sex-preferential features. It does not exhibit the sort of sex-exclusive linguistic variation as seen in Japanese. Some of the most common stereotypes about women's speech are as follows. They tend to use 'hedges' of various kinds, 'empty adjectives', intensive 'so' and other emphatic adverbs. Some other noticeable indications of women's speech are the use of 'tag-questions' and 'rising intonation patterns' in ordinary statement contexts. In all, women's speech is most characterized by 'hypercorrect grammar' and 'superpolite forms', which proves the universal belief that women are more polite and correct than men in their use of language. They tend to use relatively less slangs, obscene words and even jokes in their speech. It is reported that the rate of non-standard-in' forms in Norwich English is significantly lower among women. On the other hand, women use a far higher percentage of post-vocalic /r/ in Detroit (a prestige pronunciation) than men.

The paper concludes with some suggested topics for further accounts and analysis. Why do certain terms carry negative implications when they are used to talk about women? Why does Japanese have a large stock of metaphorical expressions which convey asexually derogatory connotation? These are the questions which have been argued along feminist lines. I have limited myself here to descriptive accounts of female speech.